

骨形成不全に対する、鍼薬併用した治療

骨形成不全とは

骨形成不全とは言葉通り「人生の最初から不完全に造られた骨」を意味します。

つまり、先天的に骨が脆い疾患の集合体と理解されます。

代表的な症状は、骨の脆弱性、以外に。

1. 骨の変形（側弯なども）
2. 低身長
3. 筋力低下
4. 靭帯の弛緩
5. 滑らかで薄い皮膚
6. 三角の顔
7. 歯牙形成不全
8. 青色強膜
9. 呼吸合併症
肺炎—子供に多い
心臓まひ—大人に多い
10. 心合併症（僧帽筋逸脱、弛緩による9
11. 難聴
12. 体温の不安定（少々高めが多い、過度の発汗）
13. 血管の脆弱性（外傷時の多量の出血、鼻血）
14. 鳩胸、漏斗胸

などがあります。

発生頻度

人種、民族、男女の差はなく、2万～3万人に1人の割合となります。

福島県では平成20年度、患者団体が把握しているのは7名です、発生率の割には患者が少ないのは、軽度のものは一生問題なくすごしてしまう場合が多いのと、最重症は乳幼児の生存率が低い為です。

精神疾患以外では、全体把握と鑑別が難しい障害の一つです。

私が治療した骨形成不全は17名（患者団体での講演でのデモ治療も含む）ですが、治療院での継続的な治療は5名です。

骨形成不全が東洋医学での「腎精不足」の典型的な障害であり、「腎精不足」による先天障害の治療にも通じるものであり、障害の絶対数の少なさを考えれば、有意な数字と思いません。

東洋医学的考察

前出の証候を東洋医学的に分析すれば。

脆弱な骨、歯牙形成不全、低身長、靱帯の弛緩、難聴、筋力低下、体温の不安定は腎精不足で説明できます。

呼吸合併症、鳩胸、漏斗胸も腎水が不足した為の虚熱の症状として説明がつかず。

青色強膜のみが説明つかないのですが、普通に考えれば、疳の虫の強い児ですが、色がまったく違います、本当に青い宝石のような、きれいな色なので……

基本的に腎精不足で虚熱の症状が多いことから「腎陰虚」が代表される証ではないかと思えます。

患者団体での講演でも、大勢の骨形成不全の方々に対しての、第一印象は「よくしゃべるなあ」でした、「虚熱っぽいなあ」という印象をもったのを覚えています。必要でしゃべっていると、いうより、なにかにせかされているような、しゃべりでした。

ただし、疾患の集合体である以上、骨の脆弱を示す「腎精不足」は間違いないのですが、陰陽、寒熱、気血は個人差がかなりあります。

かなりおおざっぱな把握ですが、「先天的に腎精不足であり、陰陽気血が不自然な状態で運行されているが、その個人なりにバランスがとれている。」ということになると思います。

脆弱な骨格のため、多い方では70～80回の骨折を繰り返します。健常者で数回の骨折でも瘀血の問題が生じてきますが、骨形成不全では大きな瘀血の形成は見られませんでした、気血津液の先天的な不足と関係するのかもしれませんが、上手く説明つきませんが、瘀血の症状（刺痛、固定痛、夜間痛）は少なくとも、この5名には見られませんでした。

症状

5名の内訳は40代、60代の男性、50代、40代、10代前半の女性です。

4名は一般企業に就労、学生も普通学級に通学しています。骨形成不全は知的障害を伴わない、言語明瞭で、手指の運動制限が少ない、見た目からも明確な障害者で、援助の対象になり易い、など、就労し易い障害のひとつです。

10代前半の女性のみ主訴は「尿失禁」で、他の4人の主訴は「背部～腰部の張り、めまい、不眠、不安感、」など多岐に亘ります。

漢方薬について

5名中、服用したのは4名です、六味丸3名、(内、あとから左帰飲に代えた者2名)八味丸1名です。

最初の患者である50代女性の場合、主訴のうち「肩背部～腰部の張り、不眠、めまい、体力をつけたい」に対し「腎陰虚」の鍼灸治療(照海の刺鍼)のみで軽減されたので、治療開始から1ヶ月後から「六味丸」を服用していただき、鍼灸治療では、数十回におよぶ骨折による関節の運動制限の治療をメインにそのつどの体調の変化に対応する治療をおこない良好な結果を得ることができました。

障害者同士の狭い世界ですので、あとの4人は最初の患者さんの紹介です。

「尿失禁」を主訴とする、10代女性のみは「腎陽虚」の治療と「八味丸」の服用となりました。

この女性は、寒がる、疲れ易い、口数が少ない、顔色が青白く、艶が少ないなどの症状から考え腎陽虚としました。

2名が六味丸から左帰飲に変えたのは、主治医がツムラ以外の処方が可能になった、ためです、2名とも左帰飲のほうが効果が高かったです。

処方を変更しなかったのは遠方で、近くに、保険で左帰飲を処方できる医師がいなかったためです。

デモ治療も含め、腎陰虚の治療のみで、「肩背部～腰部の張り、頭重、頭痛、力が入りづらい」などの症状に関しては、6.7割の方が改善をみられましたが、骨折による関節の拘縮や、障害に対する不安などによる緊張には即効的な効果は見られませんでした。

補陰剤を半年以上服用した3名は、張りが少なくなった、めまいや頭痛の回数が少なくなり、寝込むことが少なくなった、などのほか「口数が減った」と、いわれることが多くなったそうです。「機嫌悪いの?」と聞かれることがあるそうですが、体調は良く、落ち着いていられるようになったそうです。

これは陰が補われたため、煩熱が改善されたためと考えます。

尿失禁の女性については、おむつが必要でしたが、初診から腎陽虚で棒灸(刺鍼を嫌がった為)と八味丸の併用で4回の治療でおむつがいらなくなるまでに改善しました。

遠方からの通院のためと、親が医師であったため、八味丸について説明し、現在は服薬のみの治療ですが、尿失禁は完全に改善し、体調管理のための服用を継続しています。

鍼薬併用のメリット

尿失禁の女性以外は、漢方薬で先天的な腎精不足を補い、鍼灸治療でその他の不定愁訴に対応する。という「異効互補」をおこないました。

先天障害である以上、「補腎」は必ず必要な治療となりますが、鍼灸治療のみで対処しようとするれば、最低でも週1～2回の治療は必要となり、補腎をおこなってから、不定愁訴に対応するという、患者にとって経済的にも身体的にも負担が増します。

漢方薬のみで対処しようとするれば、障害に対する不安などの体調、精神状態、気候などに大きく左右される不定愁訴には迅速な対応が難しくなります。

このようにある程度、継続すべき基本の治療が存在する、先天疾患や慢性疾患では鍼薬併用は非常に有効な治療であると思います。

治療上の注意

問題となるのは、骨と肌の脆弱さです。

皮膚の脆弱さは、普通の鍼では内出血を起しやすく、JSP が出来るまではセイリンの性能のよい鍼を使っても内出血が多かったです、JSP が出来てからはかなり改善されました。

患者自身が感じている、骨形成不全の骨折の原因の多くが、医療現場での無理な体勢をとられることで、あることから、信頼関係のない人間、それが医療関係者であっても触れられることを、非常に嫌がります。

実際、押手でも少し強くすると折れるんじゃないか？と、思わせるぐらい脆弱です。触れ方を慎重にし、態度でも信頼されることが大事になると思います。

まとめ

骨形成不全は、医師を受診しても「写真を撮らせてください」といわれるほど、少ない障害の一つですが、漢方の「腎精不足」の症状の代表的な障害です。この障害に対し鍼薬併用により良好な結果が得られたことは、他の障害にも鍼灸治療、漢方治療が有効である証明だと思います。

症例数は、まだまだ少ないですが、これからも症例を積み上げてゆければと思います。